

医療・回復期(退院後訪問)

退院直後の入浴自立支援に始まり、本人の要望に対応したことで活動・参加が促進され事例

回復期リハ事例	年齢:60歳 性別:男性 疾患名:脳出血		要支援2⇒要支援1
	<p>【介入までの経緯】病前は売店経営と家事を一人でこなし、毎日銭湯へ行き、電車での旅行が趣味だった。脳出血で7か月入院。退院直後は感覚障害を伴う重度の左片麻痺があり、病後は浴槽に入れずシャワー、外出は週2回の通院のみ。頻繁に転倒しているにもかかわらず、「仕事ができるようになりたい」「電車を使って旅行に行きたい」「使いたいサービスがない」と述べ、自己の能力の理解や本人の要望をかなえるために段階的な取り組みが必要であることを理解することが必要と思われた。</p> <p>【本人の生活の目標】お湯につかりたい(コンビニまで歩いて行ける→電車を使って買い物へ行く)。</p>		
	開始時(発症後7か月退院直後)	中間	終了(2ヶ月)
ADL・IADLの状態	<ul style="list-style-type: none"> ○家事はヘルパーが行っている。 ○歩行は無造作で転倒が多い。 ○バスボードを使用すると「つかる」は不可。浴室洗い場はシャワーチェアが場所をとり、移動を妨げ、座ってのまたぎ入りは機能的にも環境的にも不可。 	<ul style="list-style-type: none"> ○可能にベッド端座位でのまたぎの応用動作練習では徐々に高く足が上がる。 ○横歩きは1歩振り出しは可能だが、3歩連続はできない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○シャワーチェアを浴槽に横付けしておき、浴室に入るとシャワーチェアと壁の間を横歩きで回り込み、それに座って片足ずつ浴槽にまたいで入ることが可能となった。
生活行為の目標	<ul style="list-style-type: none"> ○現状の浴室環境のまま、座っての浴槽またぎ入りが一人でできる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○浴槽へ入る際の体の動きを工程ごとに提案し、本人の意見を聞きながら自律的な動作獲得をめざした。 ○ケアマネジャー、訪問ヘルパーへ取り組みの説明とデモンストレーションを実施した。 	<p>【考察】 経済負担なく環境を調整した。入浴動作の工程を、一人でコントロールできる「自律」を重視した指導をしたことで、他の生活行為も客観視、自己の能力評価が進み自己管理能力が向上した。</p> <p>次の生活行為向上への具体的で妥当な目標を言えるようになった。</p>
介入内容	<ul style="list-style-type: none"> ○腹筋運動、重心移動練習、立ち上がり練習。 ○座位で重心移動をしながら足を抱え上げる練習、横歩き。 ○浴室内での実際の動作練習。 		



結果：入浴の自立により「日々お風呂につかりたい」という欲求が充足され、退院直後に不安定だった情緒が安定した。その後「コンビニまで歩けるようになる」、「電車に乗って買い物ができる」、「自宅前の自販機の管理」など、新たな生活行為の達成に及んだ。

課題：退院後のサービスを入院前に決めることができ、回復期医療と地域リハ専門職との連携で、生活行為の指導の連続性が保てるとよい。